

曲面が描く、 居心地のよい博物館

小林 繁樹 (こばやし しげき)

本館文化資源研究センター



国立アメリカ・
インディアン博物館／アメリカ

ことができる。建物から壁、展示台と、ほぼすべてが曲面で構成されているのも大きな理由だろう。

このところ、博物館の直線や完全円などで構成された空間や展示台には、違和感を覚えていた。対峙する構えが求められているようで、堅苦しいのである。

ことに人文系の博物館では、四角いガラス製の展示台が直線的に配置されている場合が多いようだ。アメリカの主要な自然史博物館なども、展示品は箱型ショーケースに入れられて展示されている。

大英博物館の、例えばリニユールされたアフリカ

国立アメリカ・インディアン博物館は、一言でいえば、とても居心地のよい博物館である。文化・教育施設であり、すぐれて政治性を帯びる博物館をこつした情緒的表現でまとめていることが妥当かどうかはわからない。けれど、その内容といい施設といい、その居住まいが気に入っている。

博物館はワシントン特別区の中心部ナショナル・モールの端、世界人気一番の国立航空宇宙博物館の東隣にある。さらにいえば、国会議事堂のいわば真向かいに位置する。二〇〇四年に開館した、スミソニアン協会・博物館群の最新で一八番目となる博物館である。開館までに一五年の歳月を要した。アメリカ先住民の暮らしや言語、文学や歴史、芸術などに貢献する生きた文化施設として設立され、美術や工芸、生活文化資料を八〇万点ほど所蔵する、世界最大規模の博物館である。

この博物館は、まずその外観から印象的である。風や水によりかたち作られた自然の地層をイメージした建物は、全体が波状にうねりながら建つ。そして建物の周囲には森や湿地、畑や草地といった先住民の元からの生活の場、いわば原風景が再現されている。西欧的に都市計画されたモールの真ん中にながら、ここだけはまるで大自然のなかにいるようだ。

一階からなかに入ると、四階まで吹き抜けの円形ステージが広がる。ここでは歌や舞踏といった催しが日々、開催される。展示は四階の映像シアターから始めるとよい。そして世界観や哲学、伝統的な知識を説明する「宇宙」、一四九二年のコロンブスによるアメリカ大陸発見以降の歴史を展示する「人びと」、三階の現在の生活を表現する「暮らし」とまわれば、ほぼ全体が見渡せる。リソース・センターも充実している。

展示の表現方法を見ても、ゆつたりとして落ち着く

やアメリカ、日本ギャラリーもそつである。規則正しい展示台の配列などは、精密機械工場のようにもある。フランスのケ・ブランリー美術館も、カーブを描くアプローチや革張りの仕切り壁などはあつても、展示場はガラス張りの方形の展示台がところ狭しと並んでいる。

西欧文化は、直線やら完全円といったきちんとした線を大切にしているのかも知れない。安上がりりとなる四角形の展示台が選ばれやすいこともわかる。けれど、やはりわたしは不規則な曲線や曲面によさを感じる。これは、いわばデザイナーの世界観の違いなのだろうか？

国立アメリカ・インディアン博物館の外観



国立アメリカ・インディアン博物館の展示場



大英博物館の日本展示場